

戎光祥選書ソレイユ

樋口健太郎著『九条兼実』

——貴族がみた『平家物語』と内乱の時代——

本 本 好 信

著者樋口健太郎氏は、平安時代末期から鎌倉時代初期を専門として、とくに摂関家の動向を中心とする研究で知られている。本書は、その樋口氏が『平家物語』の扱っている十二世紀末の時代、『平家物語』に影響されて形成された歴史像について、九条兼実を中心にすえて、その日記である『玉葉』の記事によつて『平家物語』の虚構を見直し、かつ実像の解明に挑んだ意欲作である。

まず目次を掲記してみよう。
はしがき

第一部 摂関家に生まれて

第一章 摂関家の確立

第二章 保元・平治の乱の衝撃

第三章 破格の昇進と皇嘉門院

第二部 平氏の栄華から内乱へ

第一章 後白河院政と清盛・基房

第二章 平氏政権と兼実の微妙な関係

第三章 平氏政権の崩壊

第三部 執政兼実の栄光と挫折

第一章 執政への道

第二章 執政兼実の理想と現実

第三章 短命に終わった兼実政権

第四章 晩年の兼実と九条家

あながき／参考文献一覧／九条兼実関係年表（以上）

それでは本書の内容について、順次紹介してゆこう。まず、第一部第一章（一・一と略す、以下同じ）では、院政時代には摂関家は、院と対立して没落してゆくという理解されることが多いが、白河院などは異母弟である実仁親王・輔仁親王との対立のなかで、御堂関白道長以来の摂関家と結ぶことで自身の正統性を確保しようとしていたことから、院と摂関家とは協調的であったとしている。そして、白河院は鳥羽天皇が即位すると、その外伯父である藤原公実を摂政とせず、師実の孫で師通の子である忠実を摂政に任じているが、著者はこの事実をもつて、道長以来の嫡流が天皇の外戚とは分離して、名実ともに摂関を世襲する摂関家の地位を確立したと理解している。また、忠実は白河院の協力のもとで多くの莊園を集積し、私兵として武士を編成して、権力を強化していったと説く。この院と摂関家との関係は、忠実の子の忠通にも受け継がれていったという。次に一・二では、保元の乱のことなどに論及する。忠通が異母弟の頼長を養子に迎えたのちに、長男基実が生まれたことから忠通と頼長の関係が悪化したが、これに関して忠実が頼長側に立ち忠通を義絶して、頼長への関白職をはじめ藤氏長者の地

位や莊園の譲渡を迫った。忠通は関白職のみ死守したものの摂関家嫡流の座から陥落した。しかし、忠通は美福門院得子と結び、鳥羽院の了解を得て、後白河天皇を即位させると、形勢は逆転して頼長は失脚した。さらに忠通が摂関家代々の本邸である東三条殿を没収したことから頼長は挙兵し、ここに後白河天皇と崇徳上皇、摂関家、源平の武士を分けての大乱、保元の乱へと発展した。著者は、とくにこの事実に注視して、忠通は勝利したものの、政争が武士の力によって決着をみたことで源平の武士が権力中枢に入り込むきっかけとなって、兼実をはじめとして忠通の息子たちもこの大きな重荷を背負うことになったと記している。

翌年の保元二年（一一五七）八月、兼実は昇殿を許され、これにともなつて幼名から兼実という実名が付けられたが、この実名は父忠通の際に大江匡房が提示した二つのうちの残った実名であったというが、その後も摂関家では忠通の死後、内訌が収まらずに兼実の兄である基実と基房との争いが激しくなった。基実は、平清盛の娘である盛子を新たに正妻として迎えたが、この縁組について保元の乱によって失った莊園管理の武力補充のためであったという理解を否定して、基房への対抗策とみるのが妥当だとする。しかし、基実は二十四歳という若さで死没し、摂政は結局基房に継承されたが、基実の家産の殆どは

盛子に相続された。このことについて従来からは平家による摂関家領の横領とされてきた。けれども著者は、盛子の相続は基房への相続と嫡流化を防ぎ、基実の幼少であった息子基通への継承を見据えた基通成長までの中継ぎであったとみるべきだと提言する。

つづいて一・三、ここからが兼実についての本格的な叙述となる。兼実は元服直後の保元三年正月には正五位下に叙され、三月から四月にかけて左近衛少将から左近衛中将に転任して五位中将という摂関家々嫡を象徴する地位に昇るという破格のスピード出世をとげ、永暦元年（一一六〇）八月には参議を越えて一挙に権中納言となった。さらに長寛二年（一一六四）閏十月には十六歳で内大臣に任じられている。低い身分の母を持ち、しかも三男の兼実のこの異常ともいえる昇進について、著者は実は兼実も摂関家の後継者だったとか、兼実も長子基実と並ぶ嫡子格で、忠通は最初から摂関家を基実と兼実に分割しようとしていたとの説を排して、皇嘉門院聖子との関係に注視している。忠通と正妻宗子の娘であり、崇徳天皇の中宮となった皇嘉門院聖子は、兼実の母加賀局が宗子に仕える女房であったことから兼実を猶子としたのであり、その良好な関係は、兼実の邸宅が皇嘉門院の九条殿の東に隣接した九条富小路にあって互いに頻繁に来訪していることや、さらに皇嘉門院の院司と兼

実の家司の多くが兼任していたことから確認できるとする。よって兼実が摂関家の嫡子だから財産を譲られたわけではなく、皇嘉門院が自身の父祖の菩提を弔う最勝金剛院での仏事の跡継ぎを兼実に期待したことと思惑からだつたと主張する。しかし、三男である兼実は最初から摂関を期待されていたわけではない。摂関である基実や基房のもとで、上卿として儀式を統括する役割を期待されていたのであり、このことが兼実が名実ともに公事の第一人者となつたわけであるという。

二・一では、後白河院と平清盛との関係を中心に兼実の動向を論述する。仁安元年（一一六六）十一月、兼実は内大臣から右大臣に昇進して、その後任に任官したのが清盛だったが、清盛の異例の昇進理由について、白河院の落胤だつたからだとの俗説がある。著者はこのことの成否は決したいとしながらも摂関家との関係に注目して、清盛の娘盛子が基実の妻となつていたことから、後白河院より基実の死後には清盛が基実の家、つまり摂関家を支配することが認められていて、前摂関が家の実権をもつ存在である「大殿」に準じる地位にあつたからだと開陳している。

そして、この二・一、二・二では、相続く政変・争乱についての記述も多い。嘉応二年（一一七〇）七月に起きた基房と清盛の孫資盛との争いである「殿下乗合事件」、経過は別にして、

結果的には大内裏に向かう基房の前駆の従者を武士が馬から引きずり落したという事件で、平氏の前に関白の権威が地に墜ちたことを見せつけるものになったとする。次に安元三年（一二七七）四月、延暦寺の衆徒による藤原師高の配流を要求する強訴事件、同年五月の後白河による強訴の責任を問う天台座主明雲の伊豆への配流処分、その撤回を求める延暦寺衆徒の強訴を起因とする師高の父である西光の斬首と藤原成親らの院近臣を配流に処した事件、この事件は彼らが鹿ヶ谷で平氏打倒を謀議したことが露呈したがゆえの措置で、「鹿ヶ谷事件」と称されてきた。著者は延暦寺に武力攻撃を行おうとした後白河と院近臣の暴走を清盛が介入して阻止した事件、「安元三年の政変」とする近年の研究成果を紹介する。

また治承三年（一一七九）十一月には、「治承三年の政変」が起こっている。この政変は、関白基房が後白河と結託して摂関家嫡流の地位を奪取しようとした事件だが、前述のように摂関家の「大殿」的地位にいた清盛が後白河を鳥羽殿に幽閉し、基房の関白職を解任したうえに九州に左遷したものである。

これによって平氏政権は成立したが、新たに関白となった基実の遺児である基通は十九歳で経験不足であった。基通から協力要請をうけた兼実が平氏と距離をおいていたものの仕方なく政権の中樞に参画することになったが、翌年五月にはまたもや

以仁王の謀反が発覚した。土佐への配流処分となった以仁王を匿った園城寺、これに延暦寺・興福寺、有力軍事貴族の源頼政が与力して、以仁王の事件は未曾有の大反乱となった。著者は『玉葉』の記事から、兼実が検非違使の源季貞から受けた宇治での合戦をへて頼政・兼綱父子を綺河原で打ち取ったとの報告のことや、その後に平等院執行の良俊から伝えられた殿上廊にあった首無し自殺者が以仁王だということになったという話などを紹介している。

二・三では、清盛の死後、平氏政権の崩壊過程のなかでの兼実の養護者であった皇嘉門院聖子の死去と、基房との遺領争いを焦点に述べる。また、平氏の都落ちで平氏寄りの摂政基通の後任問題が関心をよび、基房と兼実のいづれが良いか、源頼朝を巻き込んで問題となったが、意外にも基通が留任する。著者はこの件について、平氏都落ちの直前に基通が後白河と男色関係を結んだがゆえの後白河の寵愛からだという驚くべき見解を披歴している。しかし、これは単なる思い付きではなく、実証的な論証の結果であり、このことが「平氏政権の動揺を前にして結ばれたものであること、そして、その背後には、知行の不安定化を回避し、所領を保全しようとした女房冷泉局の動きがあったこと」を明らかにしている（『寿永二年『君臣合体』の舞台裏』、『史聚』五〇号、二〇一七年四月）。

三・一は、「執政兼実の栄光と挫折」と題して、摂政・関白の就任と関白解任への政治動向を論述する。文治元年（一一八五）十月、頼朝と袂をわかった義経は頼朝追討の院宣を後白河に迫っているが、兼実のみ反対したことから頼朝は後白河に兼実の摂政就任を求めている。ただ、これだけが理由ではなく頼朝の近侍者である大江広元や中原親能がもとは兼実に奉仕していたことなどから、予てから兼実と頼朝は親しい関係にあったことにもよるとする。三・二、翌二年三月に兼実は待望の摂政に任じられたが、これには頼朝の後白河に追討宣旨発給の責任をとらせて引退に追い込み、兼実を中心とした新たな体制を構築しようとした思惑があったと論定している。しかし、この兼実による朝廷改革は、頼朝が上洛せずに積極的でなかったことや後白河が実権を手放さなかったことから進まなかった。著者は、これには兼実の力量不足や兼実自身が院政という体制のなかで自分の使命を果たそうとする意識から脱することができなかったからだと述べている。そして摂政となったとはいえ、摂関家の家産は依然として基通のもとにあり、嫡流にはなれないという不安定な立場にあったとする。囁目する見解だと思う。

三・三は、奥州合戦以降の兼実の動向についての部分である。建久元年（一一九〇）正月、兼実の娘任子が後鳥羽天皇の中宮に立てられ、同三年三月には後白河が没する。これによって兼

実は政務の実権を掌握することになる。しばらく行っていないかった摂関の賀茂詣を復活させ、なかでも積極的に取り組んだのは興福寺の再建であった。これらのことは藤氏長者としての威光をみせつけるものであったが、春日社への参詣時に天皇の行幸・上皇の御幸にならった自身への中納言以下の騎馬での随行を求めたり、天皇の生母である七条院殖子への正月の拝礼に参列しないなど、天皇に僭越な行動もみえるようになり、著者はこのことが天皇や貴族たちの反発をかうようになってゆくとする。また、建久六年三月には頼朝が二度目の上洛をするが、兼実との関係は急速に冷え込むようになる。その理由について、頼朝は娘の大姫を入内させようとしていたが、すでに兼実の娘任子が入内していたことから、外戚をめぐって両者が対立したことが要因だと推測している。納得できる理解であろう。この事態をみた兼実から排斥されていた後白河の愛妾であった丹後局や源通親を中心とする旧院近臣らは頼朝に接近して、兼実と後鳥羽・頼朝との離反を画策したことが成功して、ついに兼実は関白職を奪われ、任子も内裏から追放されるという「建久七年の政変」が出来た。

この出来事から、後鳥羽と兼実の関係は不仲で、このことが兼実失脚の要因とする説が近年の研究によって提言されているが、著者は、「後鳥羽は近衛家・九条家のどちらに肩入れする

わけでもなく、双方の勢力を均衡させ、そのうえで自分が人事権を持つことで、摂関家やそれに従う貴族たちを自分の下に統制しようとしていた」と考えている。

この後鳥羽の方針によって、著者は摂関家が新たな段階を迎えたと主張する。一般に摂関家は忠通の息子である基実と基房・兼実三兄弟がそれぞれ摂関となったことから分立したといわれているが、この三つの家系は互いに嫡流の地位をめぐって争って併存はしておらず、このことから分立にはあたらなないと認識している。そして、「建久七年の政変」後には没落しても不思議ではなかった九条家が後鳥羽によって摂関家として待遇されたことから、ここに新たに摂関家としての九条家が確立したのであり、そのことが摂関家分立の理由だとしていることは新知見として評価されなければならない。

著者は、「あとがき」で、摂関家の研究を続けながらも、九条兼実にはなかなか手が出せなかったと記している。その理由として、兼実に迫ることはすなわち九条家とは何か、ひいてはなぜ摂関家はこの時代になって分立したのかという大きな問題をも明確にしなければならないという難題がひかえていたからであるとしている。

しかし、著者は本書でこの難題に果敢に挑んで、その実態を『玉葉』を中心とする史料を駆使して前述のように解明された

うえに、加えて鎌倉幕府との関係についても新たな見方を提示されている。そして、保元の乱の経緯についての叙述などもそうであるが、いままでの研究史をふまえながらも詳細な事実を本書のコンセプトからでもあろう一般読者にもわかりやすく執筆している。そこにも著者の創意工夫がある。著者自身も記されているが、南北朝から戦国時代の研究が盛んとなっているのに比べて平安・鎌倉時代史への関心はいまひとつであるが、本書がきっかけになってこの時代に興味をもつ読者がふえ、またこれを反映して研究がますます進捗することを祈念したい。

以上、本書の内容について簡略であるが紹介してきた。九条兼実については、最近になって加納重文氏によって日本評伝選の一冊として『九条兼実―杜稷の志、天意神慮に答える者か―』が刊行されている。しかし、本書は従来の研究にありがちな貴族から武士への時代変遷を主題とするものとは視点が異なり、前述のように九条兼実の生涯をその日記『玉葉』を通して辿り、そこから読み取れる内容にたづねて政治史全体を見直し、『平家物語』などによる旧態依然とした平安時代末期から鎌倉時代初期の歴史像の改変と新しい時代像の構築に意欲的取り組んだ成果であることに特長がある。その著者の意図は筆者にいわせれば見事に果たされているといつてよい。ゆえに本書を江湖の諸賢に推奨し、読者には新たな該時代史の実像をむすんでいた

だけることを願つて蕪辞を閉じたいと思う。

最後に内容について、著者樋口氏の意図を十分に理解せず、また曲解したところのあることを懼れる。その場合は衷心よりお詫びし、ご海容を願う次第である。

(B六判・一六〇頁・戎光祥出版・一八〇〇円＋税・

二〇一八年一月刊)

(きもと よしのぶ・龍谷大学文学部特任教授)